

教師あるいは異性を含む3者関係の構造

——認知的均衡理論の再検討——

教育心理学研究室 井 上 健 治

Cognitive Balance in Triadic Relations Including a Teacher or an Opposite-sex Friend

Kenji INOUE

The purpose of this investigation is to test the cognitive structures of triadic relations including a teacher or an opposite-sex peer.

36 (3 roles \times 4 sign combinations \times 3 dyadic relations required to rate) abstract triadic relations were presented to 181 university students. Each triad consists of P (self), O (another person, varied in relation to P: a same-sex peer, an opposite-sex peer or a teacher) and the third person X (a same-sex peer). Therefore it involved three dyadic relations, namely PO, PX and OX.

Two of these dyadic sentiment relations were given with + or - sign on each, and Ss were asked to estimate on seven point scales the third dyadic sentiment relation.

The results showed that the characteristics of the cognitive structures of POX situations varies with O's roles and with the combinations of dyadic relations which were given as predetermined conditions.

Both Heider's and Newcomb's theories should be closely re-examined taking account of these facts.

1. 問 題

この研究はもともと教師の“えこひいき”の問題、とくに生徒による“えこひいき”の認知についての関心を出発点にしている。

生徒の認知する教師のえこひいきは、認知する生徒、えこひいきする教師、えこひいきされる生徒の3人をその最小単位として成立するいわば3角関係のひとつの特殊なケースと考えられる。3人の人間の現実の関係および認知的関係が一つのシステムをなすという考えについてはハイダー (Heider, F. 1955) の均衡理論 (balance theory) 以来多くの研究が重ねられてきているが、教師のえこひいき、とくにその認知の問題 (この問題にとっては事実の如何よりも認知されること自体が重要であ

る) を、ハイダーらの枠組で検討するとどうなるであろうか、ということがここでの第一の関心である。

3者関係についてのハイダーのバランス理論では、認知の主体P、他者O、第3の対象Xの間の関係、すなわち $P \rightarrow O$, $P \rightarrow X$, Pによって認知された $O \rightarrow X$ の3つの2者関係が、それぞれ positive (+) であるか、negative (-) であるかの符号の組み合わせによって、POX 関係が調和して適合している (バランス状態) か、不調和で変化への圧力が生ずる (インバランス状態) かが決定されると考える (この論文では、以下第3の対象Xをすべて人物に限定し、それぞれの2者関係はすべて感情関係 (sentiment relation) に限定する)。

えこひいき認知の問題をこの POX にあてはめるならば、認知の主体はP、教師がO、他の生徒 (えこひいきされる生徒) がXとなる。他の生徒がO、教師がXとならないのは認知される関係が $O \rightarrow X$ の方向をもつからである。さて、この3者関係をいろいろに想像してみると一般的な POX 理論の仮説では説明しきれないところが

多いように思われる。

たとえばニューカム (Newcomb, T. 1968) は、PO 関係が negative ならば、この関係は均衡でも不均衡でもなくノンバランスである、つまりこの関係の組み合わせを受け入れるか、変化させようとするかははっきりした選択が欠けている状態である、と指摘した。この仮説自体が十分に明確な実証的根拠を得ていないことはさておくとしても、Oが教師の場合に、たとえきらいな教師であっても、その態度に無関心を保ち得るのか、といった疑問が生じ得よう。

このように考えてくると、ハイダーの POX 均衡理論にせよ、ニューカムの ABX システム (ハイダーの POX 理論に類似しているが前者が個人の認知体系内での関係に限定されているのに対して、第3の対象Xを媒介として成立する AB 間の相互作用を強調する) にせよ、他者 O (ABX システムでいえば相互作用の対象たる B) についての考慮が欠けていることに気づくのである。ニューカムは ABX システムのバランスへ向かう力を規定する要因として、XのAにとっての重要性、AB 関係へのかかわりの程度、などXの性質によってシステムに差異があることを仮定している。しかし、われわれの関心では BのAにとっての意味が重視されねばならないだろう。

ここで“教師のえこひいき”から問題を少し一般化して POX 理論あるいは ABX システムそのものに拡大することになる。

第一はいま述べた他者O(注)を differentiate して考えることである。たとえば $P \rightarrow O$, $P \rightarrow X$, $O \rightarrow X$ (以下これらを PO, PX, OX と略記する) のいずれもが positive (+で示す) であったとすると、ハイダー、ニューカムいずれによってもこれはバランス事態であるし、ジョーダン (Jordan, N. 1953) やロドリゲス (Rodrigues, A. 1967) もこれを確かめている。たしかに“友だちの友だちは友だち”という事態は一般的には“快”の状態であろう。しかし、ここでもしOが“恋人”あるいはそれに近い存在であり、Xが同性の友人だとしたらどうだろうか。恋人が自分の同性の友人に好意をもっている、ということが認知された場合、少なくともその好意が自分に対するものよりは弱いという保証なり確信なりがなければ、この事態は必ずしも“快”とはいえないのではない

か。さらに、Oが教師の場合には、同性の友人とも恋人とも異った事態として受けとられるであろう。

第二には3つの2者関係 PO, PX, OX のそれぞれの力関係の問題がある。

上述のジョーダンやロドリゲスの研究では PO, PX, OX の3種の感情関係を符号 (+と-) で示し、可能な8個の組み合わせ (たとえば PO が+, PX が-, OX が+)。以下これを PO, PX, OX の順にしたがって + - + のように略記する) のそれぞれについて、その関係事態がどの程度快 pleasant か不快 unpleasant かを被験者に評定させている。

このような条件下での快—不快判断は、3者の感情関係を既定の事実とした上で、Pがその事態をどう受けとめるかを問うている。しかし、PO, PX, OX の3つの関係は等価ではない (Newcomb, T. 1968) はずだし、そのいずれか2つが決定されたときに、残る関係がどうなるかは、単に符号の組み合わせによってのみ決まるものではあるまい。

つまり、PO と PX を前提としたときに OX 関係がどうあってほしいと思うか、という場合 (図 a: このような事態を以後 $++x$ というように、判断を求められる2

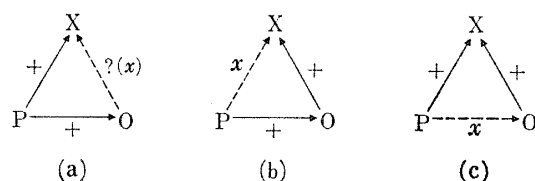


図1

者関係を小文字 x で表す。3者関係の構成員たる大文字 X とはまったく無関係の表記である) と、自己のOに対する感情 PO および認知された OX を前提にして、Xをどう思うかという場合 (図 b: $+x+$)、PX および認知された OX を前提にしたときにOをどう思うかという場合 (図 c: $x++$) では、前提となる2個の符号の組み合わせが同じでも、3者関係の構造は異なるのではないと思われる。

結局この研究の目的はつぎの3点である。

- 1 生徒による教師—生徒関係認知の特徴を認知的バランスの枠組で検討すること。
- 2 そこから派生して、3者関係の認知的バランス理論に欠けた視点である“他者OのPから見た役割の差異”が、3者のバランス関係にどのように影響するかを明らかにすること。
- 3 3者関係の中に含まれる各要素 (PO, PX, OX) の3者関係構造決定への影響力の大きさと質の差異を検討すること。

(注) この論文で扱うのは専ら個人の認知体系内での3者関係なので、以下ハイダーにしたがって、関係を構成する3者を P, O, X に統一する。ニューカムの ABX 理論に言及することもあるが、この場合も P の認知体系内のことなのでむしろ POX とおきかえた方が適当であろう。ニューカム自身も1968年の論文では POX として議論している。

つぎに記すように、この研究は仮定された3者関係事態での自己の他者に対する感情、あるいは他者間の感情関係の期待について反応を求めるものであるから、従来の認知的バランスについての多くの研究と同様に、いわば抽象化された3者関係という枠を抜け出すことができないという方法上の制約がある。しかし、教師-生徒関係を認知的バランスの枠組で検討することによってこの問題に一つの新しい視点を提供できるのではないかと考える。

2. 方 法

1) 調査の内容

被験者に3者関係のうちの2組の2者関係を+、-で提示し、残る1組がどうなるか（どうなることが望ましいか）の判断を求めるという方法をとる。

提示される3者関係はつぎのようなパリエーションをもっている。

(1) 他者（O）のタイプ

3者関係を構成するメンバーP、O、Xのうち、OおよびXに対する態度（感情、もっと端的に言えば好き・嫌い、好意・非好意のことをさすが以下態度という語を用いる）の主体であり、かつOXの態度の認知者であるPは被験者自身である。また、Pの態度およびPによって認知されるOの態度の対象であるXをすべて“同性の友人”と規定する。Pの態度の対象であり、同時にPによって認知されるXへの態度の主体であるOのタイプ（以下Oの役割と称する）はつぎの3つのケースを設ける。

- a. 同性の友人
- b. 異性の友人
- c. 教師（同性）

(2) 提示する2組の態度関係

3者関係のうち2組の2者関係の符号が決定しているとき（たとえばPOが+、PXが-）に残るひとつ（OX）がどういう関係になるか（なることが望ましいか）を直接たずねるのだが、その場合に、提示される2組の2者関係は図1の3つのタイプに分けられる。すなわち、(a) POとPX、(b) POとOX、(c) PXとOXである。

この方法はロドリゲスらの快-不快の評定よりもむずかしい判断を要求することになると思われるが、一方で、被験者のより主体的な態度あるいは態度の期待を喚起するものと考えられる。

結局、他者Oの役割（同性友人、異性友人、教師の3種）、判断（態度あるいは態度の期待）を求める2者関係（OX、PX、POの3種）、提示する2組の2者関係の符

号の組合せ（++、+-、-+、--の4種）の $3 \times 3 \times 4 = 36$ 通りの判断を求めることになる。

(3) 評定の段階

態度あるいは態度の期待の評定はつぎの7段階で回答を求めた。

- 7：非常に好意的
- 6：かなり好意的
- 5：どちらかといえば好意的
- 4：どちらともいえず、どちらでもよい
- 3：どちらかといえば非好意的
- 2：かなり非好意的
- 1：非常に非好意的

PO、PXの評定は自己の態度であって「自分はこうなるであろう」という判断のもとに、一方、OXは他者の態度期待であるから「こうなってほしい」という判断のもとに評定してもらう。

2) 調査の方法

以下の教示（印刷）によって実施した。

自分を含めた3人の間の関係のうち2組の2者関係（one wayの）が実線のようにであったとします。残り1組の2者関係（点線方向）はどうあってほしい（自分はどうあるだろう）と思いますか。

記号の説明

$p \xrightarrow{+} q$ Pはqに好意的である（qを好きである）

$p \xrightarrow{-} q$ Pはqに非好意的である（qをきらいである）

関係の希望（想像）はつぎの7段階のいずれかを選んでください。

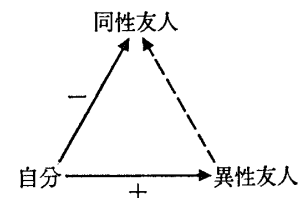
（段階の説明：上記の通り）

3者関係の中に「教師」が含まれている場合は、中学1、2年のころの自分と同性の先生を想定して、その当時の気持ちを思い起しながら答えてください。

道徳的見地からの答でなく素直な感情を答えてください。

被験者が大学生であるためあって、以上の教示では十分に理解されたと思われる。なお、それぞれの事態の提示はひとつひとつつぎのような図で行ない、言語的説明はしない。

事態の提示（例）



事態提示の順序はa、c、b（図1参照）の順に、それぞれの中では同性、異性、教師の役割の順に、またさらにその中では符号の組み合わせが++、+-、-+、--の順になっている。

3) 調査対象

2つの国立大学の2～4年生（70%ほどが3年生）、

男子81名, 女子100名。

4) 結果の整理

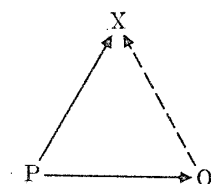
評定の数字をそのまま得点とし, 各事態ごとに男女別および男女計の平均および分散を求める(表1)。

つぎに, バランス, インバランスという観点を重視して得点7~5を+, 4を0, 3~1を-として+, 0, -別の分布(%)にまとめる(表2)。

得点分布は偏っている場合が多いので, 性差の検定は+, 0, -の 3×2 の χ^2 により行なう。事態間の比較はサイン・テストによる。表中の \gg は1%, $>$ は5%の危険率を示している。

3. 結果と考察

1) 他者(O)の第3者(X)に対する態度の期待



まずPO, PXの態度を前提にしたOのXに対する態度についての期待(OX 態度期待)から見ていこう。

(1) 概観(バランス, インバランスの観点から)

a. PO が+の場合。

PX が+ならばOX も+に(+++), PX が-ならばOX も-に(---)偏っている。つまり, いずれもハイダーの“バランス”傾向(以下バランス, インバランスはハイダーの仮説によるそれを, ノンバランスを含めるとニューカムの仮説によるものをさす)をとる。

ただし後者, つまりPX が-のときの方が+のときよりその傾向が弱い。これは好意をもたない第三者X(PX が-の場合)に対する関心が, 好意をもつ第三者X(PX が+)についての関心よりも弱いためにOX=0が多くなること, および, いわゆる positivity(+感情が-感情よりも快であるとする傾向)の結果と考えられる。

b. PO が-の場合

PX が-のときOX は0(--0)に集中している。これはニューカムのいうノンバランス状況を裏づけている。POのほかにもPX も-であるから, OX について格別の意見をもちにくい, つまり無関心の傾向といえるだろう。しかも, OX は0以外では+よりも-がむしろ多く, 少なくともOX が+のとき(--+)バランスであるというハイダー仮説は否定される。

PX が+のときにはOX は0(-+0)あるいは-(+--)に2分される。前者はインバランスにあたる

し, 後者はバランスである。ロドリゲスのデータでは(-+-)の事態は“快”と“不快”のほぼ中間に評価され(+++), (+--)以外の符号の組み合わせの中では“快”得点が最も高いが, 今回のデータで(-+-)が比較的多く現われたのはそれと同じ傾向を示したものといえる。

結局, PO が-ならばノンバランスというニューカムの考えが認められるのはこの場合PX も-のときに限られる。

(2) 役割(同性, 異性, 教師)別の比較

a. ++xの場合

さきに見たように全体としては+でバランス事態になる傾向が強いが, Oの役割別に見ると大きな有意差がある。すなわちOが異性の場合にはOX を+にする傾向が少なくなる。その傾向はとくに男子に顕著である。女子では+%だけからすると同性の場合と大差ないようにも見えるが, 得点平均で比較すると0.85の差がある。評定段階を細かく見ると, たとえば“非常に好意的であってほしい”は同性のとき26%あったのに対して異性ではわずか5%に減り, +の中では最も弱い“どちらかといえば好意的であってほしい”というのが59%を占めている。異性の親しい友人には, 同性の友人(自分の親しい友人ではあっても)にあまり好意的になってほしくない, という気持ちが働く場合が多いわけで, (+++)というバランス事態とのジレンマがうかがわれるのである。むろん, これは“ライバル関係”成立の可能性(危険性)を意識しての結果であろう。

なお, この傾向の性差(男子で大)は有意である(+0-の3段階 \times 性の χ^2 検定で $p < .01$)。男子の26%はマイナス(非好意的であることを望む)の評定をしている。男性の方が独占欲が強いということになるだろうか?

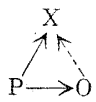
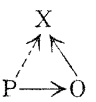
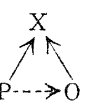
教師は同性友人と異性友人の中間にある。この異性一教師一同性の順序をどう解すべきであろうか。異性の親友, とくにそれを恋人であると仮定するならば, その存在はきわめて特殊でなければならない。つまり, 相手にとって自分は唯一の存在であり, 相手の好意の重要な部分を独占しなければならない。少なくとも相対的に大きな好意は自分に向けられるべきであり, 自分と同性の第3者Xに向けられてはならない。その意味で好意は実質的に無限ではなく, 好意の(同性友人との)共有などあり得ない。したがって, バランス事態に反するものではあっても, 同性友人への好意度があまり高くなつては困るのである。好意を抱いている異性は恋人とは限らないが, 恋人でなくともこれに近い感情が働いたのではないか。

表1 各事態の得点平均

符号配置 O の役割			同性友人 F	異性友人 L	教 師 T	役割による差
	++x	男	1.93	0.49	1.42	F>T>L
		女	1.94	1.09**	1.59	F>T>L
		計	1.94	0.82	1.51	F>T>L
	+-x	男	-1.17	-1.89	-0.83	T>F>L
		女	-1.09	-1.54	-0.86	T=F>L
		計	-1.13	-1.70	-0.85	T>F>L
	-+x	男	-0.68	-0.62	-0.48	T=L=F
		女	-0.46	-0.46	-0.33	T=L=F
		計	-0.56	-0.53	-0.40	T=L=F
	--x	男	-0.28	-0.07	-0.38	L=F=T (L>>T)
		女	-0.15	-0.10	-0.24	L=F=T
		計	-0.21	-0.09	-0.30	L=F=T (L>T)
	+x+	男	1.37	-0.63	0.83	F>T>L
		女	1.53	0.04**	0.55**	F>T>L
		計	1.46	-0.26	0.68	F>T>L
	+x+	男	-0.57	-0.40	-0.31	T=L=F (T>F)
		女	-0.61	-0.40	-0.29	T=L>>F
		計	-0.59	-0.40	-0.30	T=L>F
	-x+	男	-0.91	-0.50	-1.11	L>>F=T
		女	-0.58	-0.44	-0.88	L=F=T (L>T)
		計	-0.73	-0.47	-0.92	L=F>T (L>>T)
	--x-	男	-0.06	0.09	0.46	T>L=F
		女	0.04	-0.03	0.26	T>L=F
		計	0.00	0.02	0.34	T>>L=F
	x++	男	1.57	0.96	1.28	F>T>L
		女	1.21**	0.95	1.07**	F=T=L (F>L)
		計	1.37	0.95	1.16	F>T>L (F>>L)
	x+-	男	-0.77	-0.36	-1.16	L>>F>T
		女	-0.74	-0.63**	-1.02	L=F>T (L>>T)
		計	-0.75	-0.51	-1.08	L>F>T
	x--+	男	-0.89	-1.10	-1.35	F=L>T (F>>T)
		女	-0.67	-0.79**	-1.12	F=L>T (F>>T)
		計	-0.77	-0.93	-1.22	F=L>>T
	x---	男	0.68	0.77	0.47	L=F>>T
		女	0.81	0.54	0.51	F>>L=T (F>>T)
		計	0.75	0.64	0.49	F=L=T (F>>T)

右の欄は役割を positive 方向への高得点順に並べたもの。＞は 5%，≫は 1% で有意差のあることを示す。最高と最低の間の差の有意性は特に記すべき場合のみを（ ）内に記し，推測可能なものは省略した。たとえば，T=F≫L では T≫L を，T> F=L では T>L を示す。**は性差 ($p<.01$)。

表2 各事態における+, 0, -反応の分布

事 態	Oの役割		同性友人			異性友人			教 師		
	符号配置	xの符号	男	女	計	男	女	計	男	女	計
	++x	+	94	95	94	59	86	74	76	89	83
		0	5	3	4	15	8	11	20	9	14
		-	1	2	2	26	6	15	4	2	3
	+-x	+	0	2	1	2	0	1	9	8	8
		0	19	23	21	7	12	10	31	21	25
		-	81	75	78	91	88	89	60	71	67
	-+x	+	11	9	10	4	5	4	11	13	12
		0	36	48	43	56	57	57	46	53	50
		-	53	43	47	40	38	39	43	34	38
	--x	+	2	1	2	6	3	4	5	2	3
		0	83	89	86	85	87	86	68	80	75
		-	15	10	12	9	10	10	27	18	22
	+x+	+	87	89	88	26	45	37	66	58	61
		0	9	7	8	14	17	16	27	20	23
		-	4	4	4	60	38	47	7	22	16
	+x-	+	7	4	5	10	5	7	6	9	8
		0	40	43	42	50	53	52	66	53	58
		-	53	53	53	40	42	41	28	38	34
	-x+	+	3	4	4	1	2	2	1	2	2
		0	36	50	44	63	61	62	23	35	30
		-	61	46	52	36	37	36	76	63	68
	-x-	+	17	14	15	12	6	8	35	26	29
		0	69	78	74	84	89	87	64	70	68
		-	14	8	11	4	5	5	1	4	3
	x++	+	92	78	84	69	71	70	79	78	79
		0	6	10	8	22	23	23	21	14	17
		-	2	12	8	9	6	7	0	8	4
	x+-	+	9	11	10	14	7	10	1	4	3
		0	31	23	27	46	34	39	22	16	19
		-	60	66	63	41	59	51	77	80	78
	x-+	+	9	4	6	7	2	4	4	2	3
		0	28	40	35	19	37	29	21	21	21
		-	63	56	59	74	61	67	75	77	76
	x--	+	62	64	63	57	50	54	42	48	46
		0	34	35	35	40	46	43	55	46	50
		-	4	1	2	3	4	3	3	6	4

一方、同性友人の場合はどうか。中には唯一無二の親友ということもあり、そのときには恋人に対するのと同じような“好意の配分”についての注意が向けられるかもしれないが、一般には多数の中の一人であり、相手にとっての自分の存在ももちろん唯一のものではない。相手から自分に向けられる好意を他者に対するものとの比較において考える必要はあまりない。いわば好意の共有が可能である。

教師の場合にも好意の共有は可能である。というよりも、公平さという点からは好意の共有がなければならない。

しかし生徒は教師を同性友人のように多数の中の一人とは見ない。教師にとって個々の生徒は特別の存在ではなくとも、生徒にとっては教師は特殊な存在である。その上、生徒は日頃教師から“比較の目”で見られるのに馴れている。その比較は原則として好意度のそれではないが、生徒は教師の自分に対する態度を他の生徒に対する態度と比較して考える。他に対する態度が自分に対するそれよりも positive であれば、他者に対する教師の“えこひいき”として受けとめるだろう。

教師を含む3者関係の構造が、異性を含む3者関係にやや似ている側面があるのは、このような事情からではなかろうか。

b. $+x$ の場合

すでに見たように、全体としてはOXは一でバランスをとる傾向であった。また、バランス傾向が $(++x)$ のときよりも弱いことを指摘したが、これは実は同性と教師の場合であって異性では逆に強まっている。

同性と教師をくらべると教師は同性よりも一をとる傾向が少ない。つまりOX間にnegativeな関係を期待することが少ない。ここに教師を含む3者関係のもうひとつの特徴があるように思われる。

前項の $(++x)$ 事態では教師に対して同性友人に対するほどOXを+にしてほしくない気持が見られた。これを教師に対する一種の独占欲からのアンビバレンスと考えたが、 $(+-x)$ 事態では教師の立場にとまなう、いわば公平性の要求あるいは好意の普遍性の要求とでもいうべきものがあるのではないかとと思われる。つまり、自分の好きなOには、自分の嫌いなXを嫌ってほしいという“均衡のとれた”感情が働く一方で、いくら自分の嫌いな友人Xに対してでも、教師が生徒を嫌うのは好ましいことではないという気持も起り得るだろう。それがこの事態での教師OのXへの態度期待の得点を異性や同性友人よりも高くしている一因ではあるまいか。ついでに言えば、このような公平性の要求、あるいは好意の普遍

性の要求で説明可能な事態がほかにもいくつかあり、この解釈の妥当性を裏づけているように思われる。

たとえば、 $(x+-)$ 事態で、自分の好きな友人を嫌う教師に対して同性・異性の友人よりずっと強い拒否反応を示し、 $(x--)$ 事態で、自分の嫌う友人を自分と同様に嫌う教師を好ましく思う程度が弱いのもそうだろう。また、 $(-x-)$ 事態で自分の嫌う教師が嫌っている相手を好ましく思う傾向を、そういう教師に対する反撥（直接にはそこから生ずるXに対する“同類意識”）という点で公平性のあらわれと見ることも可能なのではないか。“独占欲”も“公平性の要求”もそれぞれが一般的なバランス傾向と矛盾する場合が多く、しかもこの両者がアンビバレントにもなり得るので、非常に偏った形では表れにくいのではあるが。

話をもとにもどして、この $(+-x)$ 事態ではOが異性の場合には、はっきりと一傾向が強くなっている。+感情が一感情よりも快であるというpositivityの傾向をも考慮するとこの一傾向は相当に強いといわねばなるまい（男女計で-1.70という得点は36通りの事態の中で最もマイナス得点が高い）。

以上 $(++x)$ $(+-x)$ の2事態を合わせて、異性には自分の同性友人にあまり好意的であってほしくない、ないしは嫌ってほしいという期待があり、この2事態の結果だけからも同性友人だけの3者関係とはかなり質の異なる構造をもつことが明らかである。

c. $-+x$ の場合

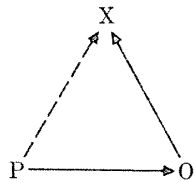
全体的傾向で見たようにOXは0と一がほぼなかばしており、他者Oのちがいによる有意な差はない。強いていえば異性では同性や教師よりも0がやや多く、ノンバランス傾向が強いようだ。異性とはいっても、この場合は好意をもたない相手だから、同性や教師の場合よりもいっそう自分とは無関係だと考えられやすいのであろうか。

d. $--x$ の場合

全体にノンバランス傾向が顕著だったが、教師の一傾向がやや強い（男女計で異性との差有意 $p < .05$ ）。 $(+-x)$ の項で挙げた公平性の要求からいえば、ここでは教師の得点がもっと高くてもよいはずだが、一方、この事態には“えこひいき”への警戒が含まれていると考えられる。というのは、対人認知の一致性（congruency: 返報性ともいう）の原則に従えば相手に対する感情と相手から自分に対する感情の認知とはそのプラス・マイナスが一致する傾向が強い。したがって、この事態（POが一）では“自分も教師にきらわれている”という条件におきかえられやすい。だから自分のきらいな友人も嫌

われてしかるべきだ、と考える被験者がいてもおかしくはない。

2) 第3者(X)に対する態度(PX 態度)



この項では PO, OX を手がかりに PX の態度を自己評定する問題を扱う。前項の諸事態とは PO が既定という点で共通であり、PX と OX の前提→評定の関係が逆転している。

現実場面でも、Xに対する態度が未定あるいは流動的なとき、それが既知の相手Oとの関係およびOのXへの態度に影響される場合はしばしばある。ニューカムのABXシステムの考えに似たケースである。

Xに対する自分(P)の態度を決定するのであるから、OX 態度期待よりも、事態に対するPの気持がよりはっきりと表われるのではないか。OX 態度期待の場合との比較を中心に検討していく。

(1) 概観

PO が+の場合では、OX の+、-にかかわらず、一貫してOX 態度期待の場合より有意にバランス傾向が弱まっている。つまり(+x+)ではPX の+傾向が弱く、(+x-)では-傾向が弱い。

一方、PO が-の場合には、同性・異性の友人ではOX 態度期待の場面と有意の差はないが、教師ではバランス傾向が強くなっている。

(2) +x+の場合

上述のように(+x+)事態よりも、xの+傾向が弱い。またもう一つの大きな特徴はこの事態が、調査した全事態の中で最も役割による差が大きいことである。これらことから、この事態は一般的な形では認知的バランスの仮説には適合させにくい事態である。

まず、同性友人の場合には、(+x+)にくらべて得点で0.48低い(1%で有意)ものの、88%が程度は弱いながらも+であり、それほど特異な結果ではない。しかし、教師の場合にはその差は0.83あり、異性友人では1.08に及んでいる。

異性友人の場合、とくに男子では際立った特徴を示す(性差は $P < .05$ で有意)。すなわち、男子ではPX を-にする者が60%もいて、(+++)事態よりもむしろ(+--)事態を選択する者の方がはるかに多いのである。これはハイダーの仮説に合わないだけでなく、(+x+)事態では(+++)を選んだという事実とも矛盾するよ

うに見える。

もっとも、(+x+)でも同性友人や教師の場合にくらべてxを+にする傾向は有意に弱かった。したがって、(+x+)および(+x-)の両事態とも、好意をもつ異性には自分と同性の友人に対してあまり好意的であってほしくないという感情で共通に説明することが可能ではある。しかし、それにしても両事態にこれだけ大きな差が生ずるのはなぜか。

(+x+)事態ではPX が+ (自分がXを好き) という前提があるから、Oがその友人に対して非好意的であってほしいと期待するのには多少の抵抗(つまり認知的インバランスへの抵抗および positivity の傾向)があるだろう。それに対して(+x-)事態では、自分のXに対する態度はまだ白紙であり、あるいは未知の人かもしれない。いずれにせよXは自分にとって今のところ間接的な存在である。したがって、いわばフリーハンドでPX の態度を決定することが可能で、それだけPのホンネが出ていてと考えてよいのではなかろうか。

そしてこのことは、3者関係が単にそれぞれの要素(2者関係)の符号の組み合わせによって性格づけられるのではなく、3者関係成立のいわば「順序」が大きな影響力をもつことを示している。このような視点を考慮に入れないバランス仮説は静的にすぎるし、その意味でロドリゲスらのバランス理論検証の方法にも大きな弱点があるといえる。

なお、教師の場合についても、異性友人に準じて解釈することができよう。

(3) +x-の場合

同様に+と-の組み合わせだった(+x-)事態では異性友人>同性友人>教師の順でOX を-に期待する傾向が強かったが、OのXへの態度がnegativeであるとわかっているこの(+x-)事態では、PX は+と-が相なかばしている。異性の友人を含む事態では(+x+)のときよりもむしろ-が少ないという、バランス理論からいえば逆転といえる現象が起っているのは“異性友人”の特異な位置づけを反映している。

(4) -x+, -x-の場合

それぞれ(-x+), (-x-)の場合によく似ているが、教師の場合には少し様子がちがう。

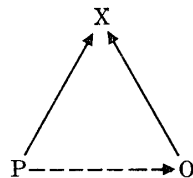
すなわち、嫌いな教師が好意をもつ相手には自分は-の態度を、教師が嫌っている相手には自分は+の態度、つまり教師とは逆の態度をとる傾向が強まっている(ただし後者のケースは絶対数として多いわけではない)。

まず(-x+)事態は自分の嫌う(同時に、前に述べた congruency でいえば多分自分を嫌っているであろう)

教師が第3者Xを好いては余り面白からうはずもない。この事態でPXに－が多いのは、そのような、いわば“えこひいき”されている（と思う）生徒に対する反撥の結果を示すものだろう。

（－ x －）事態で＋がやや多く見られることの理由についてはすでに考察した。

3) 他者（O）に対する態度（PO 態度）



この事態は PO の態度が未定の事態であるから、OX 態度期待や PX 態度とは少し性質を異にしている。

この事態は、対象Xに対する態度の共通性が2者(PO)間を接近させる力をもつか、また、態度の不一致が PO を遠ざけるか、という問いにおきかえることができる。対象Xが思想や信念であれば、その一致による2者関係の接近は“同志的結合”、趣味やその他の活動であれば“同好的結合”とよばれて青年期の友人関係の一つの特徴と考えられている。この場合のようにXが第3の人物であっても（あるいは人物であるだけいっそう）、態度の共通性あるいは不一致性が PO 関係に影響すると予想される。これはニューカムがその ABX システムで予想していることでもある。

結果は、程度の差こそあれ、上記の考えに一致している。つまりPとOのXに対する態度が共通ならば PO は＋となり、不一致ならば－となる。少くとも逆のケースはごく少ない。

符号の組み合わせごとに対象別の細かな比較をすることは省き、いくつか目につくことを指摘し、問題点を検討しよう。

まず、態度一致の場合のうちでも、++の一致が、--の一致よりも PO を接近させる、ということがある（3種の役割とも $P < .01$ で有意）。これは＋が－よりも快であるため、と説明することもできようし、ニューカムの仮説のように、Xの2人にとっての重要性に差がある（おそらくは＋の相手の方が－の相手よりも重要だろう）からバランスに向う力に差があるのだ、と考えることもできよう。

第二に、態度不一致の場合には教師が最も嫌われやすい、ということがあげられる（2事態とも有意）。その原因についてはすでに述べた好意の普遍性の要求で説明できるのではないと思う。

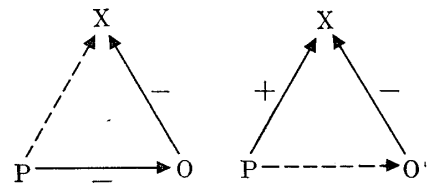
第三に、態度不一致のタイプ（ $x+$ －と x －＋）の差

はほとんどないが、異性友人についての男子の態度には 0.74 という大きな差がある。男子は、自分の好きなXを嫌う異性よりも、自分の嫌いなXに好意的な異性を好ましくないと思う傾向が強い。この点もすでに挙げてきた男子の対異性態度の特徴と軌を一にしてしている。

第四に、態度の一致が PO を接近させるのか、あるいは逆に PO の好意的な関係が態度の一致を生むのか。同様に態度の不一致が両者を遠ざけるのか、あるいは逆に PO の非好意的な関係が態度の不一致を生むのか、という問題である。

ニューカムはその ABX システムの考えの中で、相互作用→情報交換→共通の情報→態度の類似性→相互魅力増加→相互作用→…という循環を示唆している。この調査の範囲ではこの問題に対する直接の答を得ることはできないが、若干検討に値すべき部分がある。

それは PX 態度事態（たとえば－ x －）と、この OX 態度事態（たとえば x ＋－）の x の値を比較してみるのである。なぜこの2つを比較するかといえば、（－ x －）は x が＋ならば（－＋－）となって“バランス”になり、（ x ＋－）は x が－ならば同じく（－＋－）の“バランス”状態になる。その、いわゆる“バランス”への力の強さを見ると、前者では、同性 0.00、異性 0.02、教師 0.34 で教師がややその傾向があるがほとんど0に近い。つまり PO が－ならば、OX の－が認知されてもそれがXへの態度には影響しない。



ところが、後者では、同性－0.75、異性－0.51、教師－1.08というように、自分の好きなXを嫌う相手には非好意的になる、という傾向がはっきりしている。このことは、前者がノンバランス事態だということから予想できたことではあるが、このような差のある場面は他にもいくつかのケースがある。

すなわち異性における（－ x ＋）と（ x －＋）。この場合は“きれいな異性が好きな同性をきらう”傾向よりも“自分のきれいな同性に好意的な異性をきらう”傾向の方が強い、ことを示す。また、異性と教師における（＋ x ＋）と（ x ＋＋）に差があって、“好きな異性（教師）が好意をもっている同性を好む”傾向よりも“自分の好きな同性に好意的な異性（教師）を好む”傾向の方が強い（好きな異性が好意をもっている同性は好むどころか嫌う傾向がむしろあったのはすでに見た通り）。

他のケースでは有意差はみられないが、傾向としては一貫している。これを一般的にいうならば、好意をもつ（もたない）相手の態度に自分の態度を一致（不一致）させる傾向よりも、自分と態度が一致（不一致）する相手を好むようになる（きらうようになる）傾向の方が強い、ということである。

4. 結 び

生徒による教師—生徒関係の認知を、POX 3者関係のバランス理論の枠組で検討すること、合せて POX 関係の構造の第2者Oの役割による差異を調べ、さらに POX 関係を構成する各要素間の影響力の差異を検討すること、等を目的として、大学生を対象に POX 関係の構造についての調査を実施した。

その結果、他者Oが同性友人、異性友人、教師である場合にはそれぞれに3者構造が異なり、とくに異性友人や教師の場合の特徴が考察された。異性に関しては、好意をもつ異性に対する“独占欲”が構造の特徴を形成し、教師に関しては、異性よりは程度の軽い“独占欲”と、一方では、第三者的・客観的に教師に対して好意の普遍性を要求する感情があり、この2つがからみあって複雑な3者構造を現出していることが考えられた。

また、PO, PX, OX の各要素が構造の決定要因として等価ではなく、構造決定の先行条件としての影響力の質と量にも差があることが確認された。

この研究は、仮想された3者関係によるものであり、現実の関係にもとづいたものではない。ここにこの研究の最大の弱点がある。また、そのことと関連して、提示された2者関係は $P \rightarrow O$, $P \rightarrow X$ あるいは $O \rightarrow X$ という一方向的でかつ+あるいは-という単純な図式で示されるものであり、現実の人間間に存在するダイナミックな

関係を十分に再現し得たとはいえない。

さらに、どのような3者構造を選択するかの原理にはもとより個人差がある。ここでは少数の特徴的な傾向は捨象して多数派の態度について議論したが、少数派の方向もまちがいなく人間関係についての一つの選択であり、その心理的メカニズムは興味ある課題として残される。

被験者が大学生であることにも問題はあろう。異性の友人の事態については適切な調査対象ということができようが、当面のより重要なテーマであった教師—生徒関係事態はいわば回想にもとづくものであり、回想にともなう一つの方向づけ、たとえばステロタイプな見方の優位、といったことも起ったかもしれない（方法をやや変えた、中学生を対象にした調査も実施したが、報告はつぎの機会に譲る）。

しかし、上記のような様々な問題点、分析の不十分さを残しながらも、教師—生徒関係を理論的に考察する一つの新しい試みがなされ、また、3者関係のバランス理論の検証に従来とは別の視点を導入したという点で、興味ある課題であった。

References

- Heider, F. 1958 *The Psychology of Interpersonal Relations*. Wiley.
- Jordan, N. 1953 Behavioral forces that are a function of attitude and cognitive organization. *Human Relations*, 6, 273-287.
- Newcomb, T. 1959 Individual system of orientation. In: S. Kock (ed.) *Psychology: A Study of Science*, Vol. 3. McGraw-Hill pp. 384-422.
- Newcomb, T. 1968 Interpersonal balance. In R.P. Abelson et al. (eds.) *Theories of Cognitive Consistency*. Rand McNally. pp. 28-51.
- Rodrigues, A. 1967 Effect of balance, positivity, and agreement in triadic social relations, *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 472-476.